



彼女との約束

〈宮崎県〉

黒木 新香 20歳
くろき にいか

「がんだった」。高校2年生の夏、親友はそう言った。いつも笑顔で明るく太陽みたいなのが、いつも通り笑顔だった。

骨肉腫。骨にできる悪性腫瘍で、彼女の左膝関節にできていた。運動が得意で中学ではソフトボール、高校では幼少の時から続けていた書道部に入り「将来の夢に一步近づけた」と喜んでいたら、そんな彼女に医師は宣告した。「走ることに、膝を曲げて座ることができなくなりです」

書道の席上揮毫大会で個人、団体共に優勝を目指していた彼女にとって、膝を曲げて座ることができないことは、夢を諦めろと言われるのと同じであつた。

手術は成功し、幸い転移もしておら

ず、化学療法が始まった。10キロ以上痩せて、誰だか分からないくらいやつれていた。

それでも「新香、来てくれてありがとう」と常に笑顔だった。そんな彼女がある日、「みんなと一緒に卒業したかった。何で私のがんにならないといけないの」と初めて弱音と涙を流した。私は、そんな彼女を前に何も返すことができなかった。抗がん剤で苦しんでいる彼女に「がんばれ」のひと言も掛けることができなかった。

彼女が入院している病院には、彼女と同じ、がんで苦しんでいる小さな子どもばかり。さまざまな疼痛に苦しんでいた。

彼女に「新香、お願いがあるの」と言われ、「なに?」と聞くと「がんを治して

とは言えないけど、あなたがいるだけで周りの人が笑顔になれて、痛みやつらさを緩和できる看護師になって」と言われた。

私は彼女と約束をした。絶対、看護師になって、苦痛症状の緩和を行うことができる緩和ケア認定看護師になることを。あの時の彼女の笑顔の裏のつらさに気付いてあげることができるよう看護師になることを。